

二〇二四年度入学試験

試験問題

国語

注 意

- 一、開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 二、受験番号を解答用紙の三か所に書き、答えはすべて**解答用紙**に書きなさい。
- 三、問題は **1** から **5** までで、八ページにわたって印刷してあります。
なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に別紙1、裏に別紙2が印刷されています。
- 四、終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

1

次の①～⑧の傍線部分について、漢字は読みをひらがなで書き、ひらがなは漢字に直しなさい。

- ① 艶のある髪の毛。
- ② 鉛色の空。
- ③ 人混みに紛れる。
- ④ アリの行列を凝視する。
- ⑤ 手紙のあて書きを書く。
- ⑥ 長期きゆうかの計画を立てる。
- ⑦ 神社で合格きがんをする。
- ⑧ 敵の侵入をこぼむ。

2

別紙1の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分(1)「まるで小さな赤い釣り鐘をはてしなく並べたようだった。」とあるが、この部分は、いくつの文節に分けられるか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 五 イ 六 ウ 七 エ 八

問2 傍線部分(2)「自分の質問の答え」とあるが、その「答え」として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 苺の方がおしゃれで、若い女性が喜ぶということ。

イ 苺の方が収穫がしやすく、母が喜ぶということ。

ウ トマトより苺を育てる方が、息子が喜ぶということ。

エ トマトより苺の方が儲かり、父が喜ぶということ。

問3 傍線部分(3)「心を見抜かれてしまう」とあるが、それは誰のどのような心か。三十字以内で書きなさい。

問4 傍線部分(4)「野菜や果物の味には特別な期待は抱かなくなっていた」とあるが、それはなぜか。五十五字以内で書きなさい。

問5 傍線部分(5)「母ちゃんの手は言葉より雄弁だ」とあるが、このときの恵介の心情を説明したものととして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 自分が実家に帰らなかった二年の間に、両親は苺作りに精を出していたのだとしみじみとした気持ちになっている。

イ 自分が実家に帰らなかった二年の間に、両親はすっかり年をとってしまったとせつない気持ちになっている。

ウ 二年ぶりに見た母親の仕事ぶりに驚き、自分が帰ってこなくても大丈夫だと安心する気持ちになっている。

エ 二年ぶりに見た母親の仕事ぶりに驚き、天性の才能があることに心から感心する気持ちになっている。

別紙2の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分(1)「パートナーロボット」とはどのようなロボットか。本文中から二十九字で抜き出し、始めと終わりの四字を書きなさい。

問2 傍線部分(2)「どの目的に向かって行動すべきかを、自らの意図や欲求で決める必要がある。」「むろん、ロボットの持つべき意図や欲求は、人間にサービスを提供し、人間を快適にするというものでなければならぬ。」とあるが、「自らの意図や欲求」で行動するロボットの例として**適当でない**ものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 飲食店において客の入店を確認し、客が入ってくるたびにあいさつをしてくれる接客ロボット。

イ 体調に関する相談の内容に応じて、適切な診断を下すことができる医師ロボット。

ウ 料理や客の好みに合うように、飲み物を選んで提供してくれるソムリエロボット。

エ 学生個人個人のレベルに合わせて、適切な授業を行ってくれる教師ロボット。

問3 傍線部分(3)「私の予測」とあるが、それはどのような予測か。七十字以内で書きなさい。

問4 本文中の(①)(②)にあてはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 例えば イ すなわち ウ なぜなら エ しかし

問5 本文についての説明として**適当でない**ものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 現在のロボットのおかれた状況を踏まえ、今後の展望も描かれている。

イ 具体例を用いて、一般の読者にも想像しやすい文章となっている。

ウ 専門用語を多用することで、研究者に向けた解説書となっている。

エ 人間がパートナーとしてロボットに求める条件を、研究によって明らかにしている。

4 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

※筑紫に、※なにがしの※押領使など(1)いふやうなるものありけるが、※土大根を(2)万にいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて(3)食ひけること、(4)年久しくなりぬ。ある時、館のうちに人もなかりける(5)ひまをはかりて、敵襲ひ来て、囲み攻めけるに、館のうちに(6)兵二人いで来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してけり。(7)いと不思議に覚えて、「日ごろここに※ものし給ふとも見ぬ人々の、※かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「※年ごろ頼みて、朝な朝な※召しつる土大根に※さぶらふ」と言ひて失せにけり。

深く信をいたしぬれば、※かかる徳もありけるにこそ。

(「徒然草」より)

注(※) 筑紫Ⅱ九州北部の旧国名 なにがしⅡだれとかいう 押領使Ⅱ悪人を取りしまる役人 土大根Ⅱ大根
ものし給ふⅡ住んでいらつしやる かくⅡこのように 年ごろⅡ長年 召しつるⅡお食べになつてゐる
さぶらふⅡございます かかるⅡこのような

問1 傍線部分(1)「いふやう」(3)「食ひける」をすべてひらがなで現代かなづかいに改めなさい。

問2 傍線部分(2)「万にいみじき薬」とあるが、本文中での意味として最も適當なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 安価で手に入れやすい薬
- イ 高価で手に入れにくい薬
- ウ すべてに効くすばらしい薬
- エ どこに出しても恥ずかしくない薬

問3 傍線部分(4)「年久しくなりぬ」(5)「ひまをはかりて」の本文中での意味として最も適当なものをそれぞれ次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

(4) 「年久しくなりぬ」

ア 年をとってしまった

イ 長年になった

ウ 年が改まった

エ 長時間になった

(5) 「ひまをはかりて」

ア ぼんやりとして

イ 暇な時間を作って

ウ すきをねらって

エ 落ち着いた様子で

問4 傍線部分(6)「兵」とあるが、それは誰のことか。本文中から抜き出して答えなさい。

問5 傍線部分(7)「いと不思議に覚えて」とあるが、主語は誰か。本文中から抜き出して答えなさい。

問6 筆者の意見として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

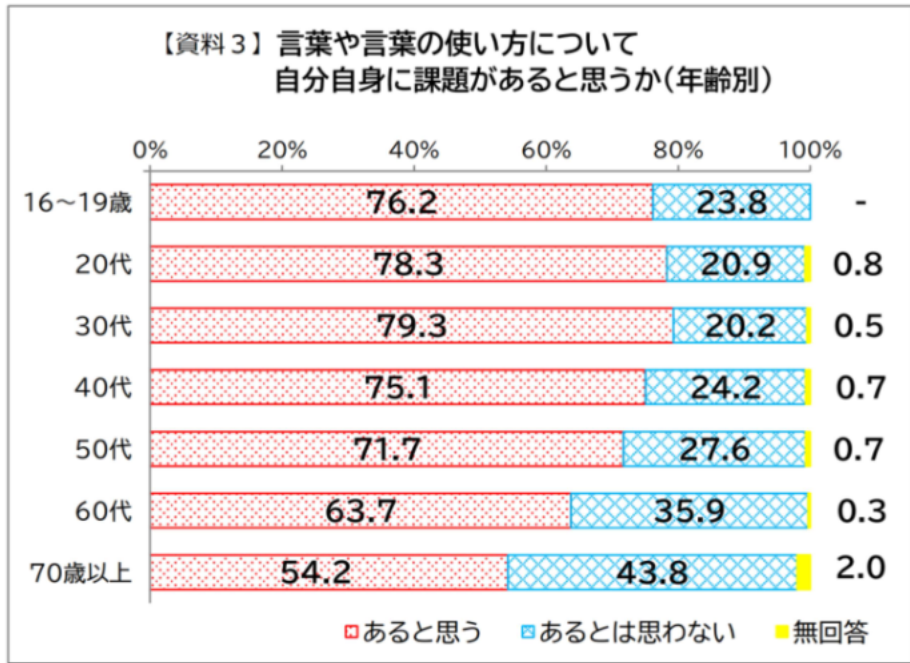
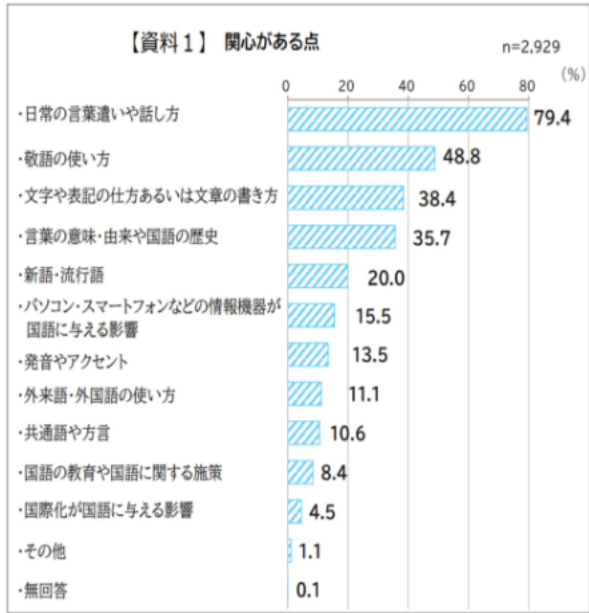
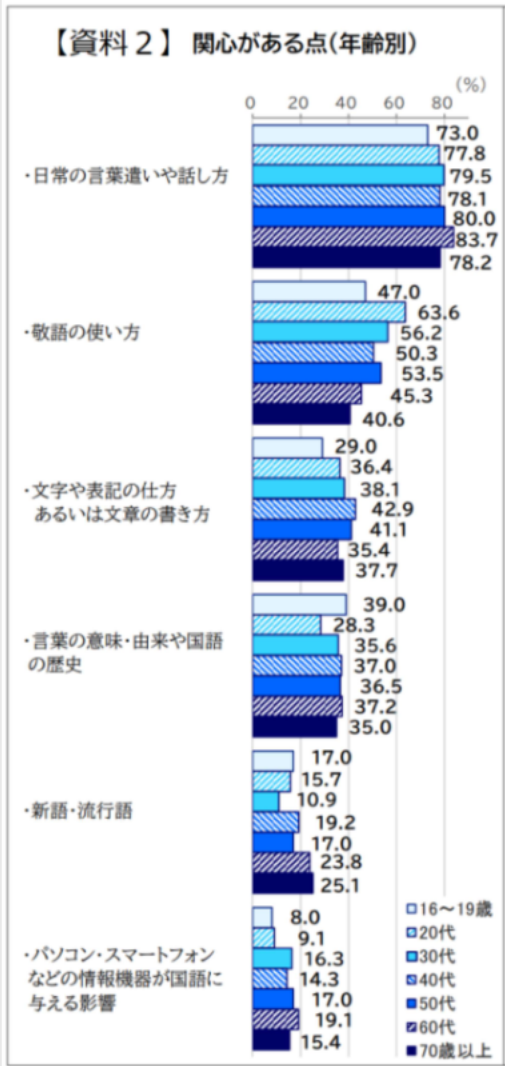
ア 深く信じると天からの恵みを得られるものだ。

イ 深く信じると思いがけないご利益があるものだ。

ウ 深く信じると気づかないうちに裕福になるものだ。

エ 深く信じると夢と現実の区別がつかなくなるものだ。

5 次の【資料1】～【資料3】と【話し合いの様子】を読んで、あとの各問いに答えなさい。



文科省令和3年度「国語に関する世論調査」より

【話し合いの様子】

みどりさん 今日先生から言葉遣いについて注意されてしまったわ。正しい言葉遣いは本当に難しいな。

あおばさん 気にしているのはみどりさんだけではないわ。【資料1】を見ると、「日常の言葉遣いや話し方」を気にしている人は

約①割と最も高くなっているもの。その次に②に関心を持っている人が半数近い割合なのね。自分の言葉遣いに自信を持っている人は少ないのではないかしら。

【資料2】を見てもどの年齢の人も日常の言葉遣いや話し方に関心をもっているけれど、②は③が最も関心をもっているようね。必要に迫られて使い出すようになるからかしら。

でも、【資料3】を見ると、どの年代も言葉や言葉の使い方について課題を抱えているわ。その中でも特に④課題を感じているのね。

あおばさん いろいろな年代の方と話をすることで、正しい言葉遣いを身につけていけるといいわね。

あかりさん そうね、自信をもって話ができるようになるといいわね。

問1 【話し合いの様子】の中の①に入る数字として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 6

イ 7

ウ 8

エ 9

問2 【話し合いの様子】の中の②に入る言葉を答えなさい。

問3 【話し合いの様子】の中の③に入る年代として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 20代

イ 30代

ウ 40代

エ 50代

問4 【話し合いの様子】の中の④に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 上の年代の方が
- イ 下の年代の方が
- ウ どの年代も変わらず
- エ 40代と50代が

問5 【話し合いの様子】の中の二重傍線部分「正しい言葉遣いを身につけていけるといいわね」とあるが、正しい言葉遣いを身につける方法について、あなたの考えを次の「注意」にしたがって書きなさい。

〔注意〕① 題名は書かずに本文から書き出しなさい。

② 具体的な例を一つ挙げなさい。

③ 原稿用紙の正しい使い方がい、全体を百六十字以上二百字以内にまとめなさい。

これで問題は終わりです。

別紙1（本文は、設問の都合で省略した箇所があります。）

農業を継ぐのが嫌で地元を離れ東京で妻子と生活している恵介は、父親が脳梗塞で倒れたという連絡を受け、静岡の実家に様子を見に行くことになった。

黒いマルチシートに覆われた台形の高畝に、苺の実がしなだれかかる様子は、(1)まるで小さな赤い釣り鐘をはてしなく並べたようだった。

白い五弁の花の真ん中、黄緑色の花芯は、散りかけたものになると、苺のミニチュアみたいにくらんでいふくらんでいる。苺のまだ小さな実は緑色、中ぐらいのものは白く、大きく育ったものは赤い。

同じ蔓の先に、花と、小さな実と、赤く熟れた実が同居している。長く垂れた蔓とは別の、新しく伸び出した蔓にも花が咲きはじめていた。農家の多いこの土地に生まれた恵介でも、苺がなっているのを間近で見たのは初めてだった。苺狩りなんかしたこともないし（農家にとって作物の収穫は娯楽ではなく労働だから）。

畝と畝の間の通路に足を踏み入れてみた。トマトより畝が高く、脛の上のほうまである。母親はハウスの隅にしゃがみこんでいた。ちいさな体が高い畝とみっしりした繁みに隠れて、草葉の間から姉さんかぶりの頭が見えるだけだ。

恵介は、パリコレのモデルみたいな歩き方しかできない狭い通路を奥まで進んだ。母親はしゃがみ歩きをしながら、せつせと苺を摘み、摘んだ苺を腿と左手で抱えた平たいトレーに並べていた。こちらにはまるで気づいていない。

「寝てたんじゃないの」
声をかけると、ようやく顔をあげた。

「ああ、おはよう」

照れ笑いなのか、にっと歯を見せる。そうすると、顔の真ん中に皺が集まった。

母親は六十七歳。顔だちじたいは童顔なのだが、一年中紫外線に晒される農家の主婦の宿命なのか、皺が深いから年より下に見られることは少ない。

「朝のうちに採っておかにはあと、味が落ちるら」

言いわけじみた口調で言い、作業に戻ってしまった。昨日今日身につけたとは思えない、手慣れた動作に見えた。

「ねえ、どうしたの、これ」

恵介は苺が並んだトレーを指さす。

「え？ ああ、薄型トレー「トレトレ君」。カキタ種苗の新製品」

いや、そっちじゃなくて。

「苺のこと」

「紅ほっぺ」

品種はいいから。

「なんでトマトをやめたの」

親父には似合わない。トマトの時も思ったことだが、苺はなおさらだ。

「苺は儲かるって、お父さんが言うもんで。まあ、そんなでもなかったけど。去年は」

「去年から？」

「おとしから」

「なぜ急に」

「ほら、苺のほうがおしゃれじゃんか。喜ぶんじゃないか、って思っただらあね」

「喜ぶって、誰が？」

聞いたとたん恵介には答えがわかってしまった。(2)自分の質問の答えが聞きたくなくて、母親の隣にしゃがみこみ、収穫を手伝う、ふりをした。

実をぶら下げている茎は、楊枝のように細いのに、なかなか折れない。母親が顔の皺を真ん中に集めた。

「ほら、こうするの」

指の間にへた近くの茎をはさみ、折るといより、くいつと上にひねりあげた。

まねをしてみた。くいつ。

苺を潰してしまった。難しいもんだ。

くいつ。くいつ。ようやく採れた。

母親が苺をひと粒、恵介の鼻先に近づけてくる。

「食べてみ」

差し出した恵介の手のひらに落としたのは、ひときわ大きくて、くいつと歪なかたちをした苺だ。

「まず先っぽのとこ齧ってみ。先っぽがいちばん甘いから」

言われたとおりにした。

あ。

ちよっと、待て。なんだ、これ。甘い。

ほのかに酸っぱい。

うまい。

苺って、こんなにうまいものだった。すっかり食べ慣れてしまっ、味なんか忘れていた。もしかしたら、いままで食べた苺の中でいちばんうまいかもしれない。

「なぜ」こんなにうまいのか、とまで言う必要はなかった。くいつして鋭い人ではないのに、子どもの頃から母親には、表情だけで(3)心を見抜かれてしまう。

「そりゃあ、採れたてだもんで。それに、ほら、出荷すんのは、熟れる前に詰めちゃうから」

十八年前、東京で暮らしはじめて気づいたのは、野菜の味が違うことだ。

たとえば、とうもろこし。夜店で食う焼きとうもろこしも、スーパーで買ったのを茹でてみても、田舎のとうもろこしとはまったく別物だ。恵介が子どもの頃から食べ慣れているとうもろこしは、畑から採ってきたのを皮ごと鍋にぶちこみ、あちあちと声をあげながら指先のそのまま先で剥いてかぶりつく。それだけのものだ。なのにうまい。ひと粒ひと粒が柔らかくみずみずしく、甘い。テレビのグルメリポーターが刺身も野菜もなんでもかんでも「甘いつ」というせりふを吐くのはわけが違う。ほんとうに甘いのだ。ちなみに生で食べば、もっと甘い。

(略)

実家で採れた野菜なら食べ頃は明々白々だが、店頭に並んだものは収穫時期がわからず、熟していなかったり、鮮度が落ちていたりする。東京で何年も暮らしているうちに、まあ、こんなもんだよな、子どもの頃に食べたものはおいしく感じるからな、といつしか(4)野菜や果物の味には特別な期待は抱かなくなっていた。

採れたても採れたて、いまのいままで茎とくつついていた苺をほおばりながら恵介は思った。

そうか、これが、苺の味なんだ。

母親がもうひと粒を突き出してきた。紅ほっぺというこの品種はどれも大粒だ。今度は横からかぶりつく。

さまざまな果物の味を想像させながら、そのどれにも似ていないおだやかな甘さ。酸っぱさはほんのかすかで、味の脇役。頬がきゅつとすぼまる。思わず声が漏れた。

「うまい」

母親はカニ歩きをしながら、苺を摘み続けている。手早く、精密機械みたいに正確に。

トマトやきゅうりをもぐ時も、田植機が入れないすき間に苗を植える時も、梨に袋をかける時も、母親の農作業の手さばきは、ふだんのししおどしみたいに焦れたい言動とは大違いにスピーディーだ。

恵介はちんまりした膝が支えている収穫用トレー「トレトレ君」に腕を伸ばして、かわりに持った。母親は驚くでもなく礼を言うでもなく、最初から恵介がそうしていたかのように恵介の抱えるトレーに苺を並べていく。見る間にトレーが赤い実で埋めつくされた。それを見ただけで、自分が帰ってこなかった二年間にこの家で何があったのが理解できた気がした。いつも思う。(5)母ちゃんの手は言葉より雄弁だ、と。

「そういうえは、俺に渡したいものってなに？」

母親が手を止め、ハウスの天井を見上げた。なんだっけ、という表情だ。精密機械が一瞬にして水溜れのししおどしに戻ってしまった。

「ああ、そうそう」立ち上がった瞬間、腰を押さえて呻いた。「あ痛たたつ」

「だいじょうぶ？」

親父も母親もだいぶ前から腰痛に悩んでいる。毎日の農作業の過酷さを考えたら、腰を痛めてあたりまえだった。母親は自分で自分の腰を揉み、膝もさすりながら呟く。

「年かね。」らくらくコッシー」がにやあとね。らくらくコッシー、壊れたから」

らくらくコッシーというのがいったい何なのか、聞けば話が長くなりそうで、あえて聞かなかった。恵介は収穫トレー「トレトレ君」を抱えて、出口に向かう母親の後を追う。畝の間をガニ股でよたよた歩く姿は、二年前よりさらに縮んだ気がする。孫が生まれ、母親が「バアバ」になったのは、もうずいぶん前だが、恵介の知らないうちに本当のおばあちゃんになっていた。

(荻原浩「ストロベリーライフ」より)

別紙2 (設問の都合により図を省略しました。)

ロボット開発のロードマップ

※メタレベルの認知機能の研究開発の一方で、重要なのが実際に社会の中で働くロボットの実現である。図1-7は、私の研究室でのロボット開発のロードマップを示している。まず単一の人間らしいサービスを提供できるロボットが実現される。例えば、レストランでの対話サービスをを行うロボットや、語学を教えるロボットである。これらのロボットは、現時点ですでに実現している。

高齢者や幼児を対象にした対話ロボットは、二〇二一年現在、まさに研究開発が盛んに行われている。単なる情報提供だけでなく、雑談するなどして、相手を元気づける能力も必要となる。

さらにその先には、通訳/案内ロボットや、受付/コンシェルジュのロボットが実現でき、最終的には、人間に付き添い、様々なサービスを提供できる、(1)パートナーロボットが実現できると期待している。

人と関わるロボットの究極の姿は、執事のように人に寄り添い、様々なサービスを提供してくれるようなロボットになるだろう。人が最も関わりやすく、最も頼りにしやすいのは人である。近い将来、人と関わるロボットの性能がさらに向上すれば、多くの人が頼れる相談相手や、頼れる執事として、パートナーロボットを利用するようになると想像している。

図1-8は、メタレベルの認知機能とロボット開発の関係を表す。知能、身体性、※マルチモーダル統合は、いわゆる基礎技術である。これらの技術の研究開発が進み、ロボットが人間らしい複雑なタスクを複数こなせるようになると、それらを自律的に切り替えて行動する機能が必要となる。それが意図や欲求である。人間が自らの意図や欲求にもとづいて行動を決めるように、複数の目的を持てるロボットは、(2)どの目的に向かつて行動すべきかを、自らの意図や欲求で決める必要がある。

むしろ、ロボットの持つべき意図や欲求は、人間にサービスを提供し、人間を快適にするというものでなければならない。いずれにしろ、ロボットが自らの意図や欲求に従って、複数の目的を持って行動するようにになると、その性能や人間らしさは格段に高くなり、ロボットを利用する人々は、自然とロボットに頼るようになる。複数の仕事をこなせるロボットに、気軽にいろいろな仕事を頼むようになるのである。

そうして人間とロボットの間で信頼関係が築かれると、おそらく人々はロボットに人間に似た意識を感じるようになる。そして意識を感じる相手とは、社会的な関係を持つようになるというのが、(3)私の予測である。人間と社会的な関係を持つロボットは、もはや単なるロボットではなく、人間にとつてのパートナーになると期待される。

マルチモーダルチューリングテスト

コンピュータと人間を比べるテストを、「チューリングテスト」と呼ぶ。チューリングテストは、計算機の原理を発明したアラン・チューリングが発案した。コンピュータの利用者が、コンピュータのチャット機能で、誰かと話しをしているとしよう。その際、チャットの相手が別のコンピュータなのか、人間の操作者なのか区別がつかなくなったとき、その別のコンピュータの知能のレベルは、人間に等しいと認定するテストである。

このチューリングテストは、AIの教科書では必ず紹介される有名なものである。しかしながら、このテストでコンピュータの知能のレベルが、人間レベルであるかどうかを厳密に判定することはできない。例えば、人間が行うようなタイピミスやわざとするようにコンピュータにプログラムすると、それによって、利用者は人間らしいと勘違いする。

このようにチューリングテストでは、厳密にコンピュータの知能のレベルが人間と同等であるかどうかを判定することは難しいのであるが、一方で、その方法は非常に簡単に直感的にわかりやすい。

私たちの研究でも、このチューリングテストを拡張した、「マルチモーダルチューリングテスト」を定義し、それによって、ロボットの人間らしさの評価を試みている。図1-9に、その様を示す。

ロボットの人間らしさを評価する拡張されたチューリングテストは、元来、トータルチューリングテストと呼ばれる。まず、そのトータルチューリングテストを紹介しよう。トータルチューリングテストとは、目の前にいる非常に人間らしいロボットと対話した際に、そのロボットがロボットであると気がつかないという状態である。

いくら人間そっくりのロボットであるアンドロイドの技術開発が進んできたと言えども、このようなトータルチューリングテストを、パスできるようなレベルには到達していない。アンドロイドを近くで目にすれば、その皮膚が人工物であることはすぐに解かる。

むしろ、少し離れた場所から観察すると、その判別は非常に難しい。以前、遠隔操作のアンドロイドを薄暗いカフェにおき、研究室のスタッフが、そのアンドロイドと話しをしていた。そうしたら、丸一日誰もそれがアンドロイドであることに気がつかなかった。アンドロイドが日常生活の場面にいたら、どれくらいの人が気づくかという実験だったので、気がつく者は一人もいなかったのである。人と話しているアンドロイドの場合は、周りから観察する者は、人間と話しているのだから、人間に違いないという先入観を持って、観察していたと思われる。

(1) アンドロイドを目の前にして、自分で対話すれば、すぐにそれがロボットだと気がつく。もつともそれでも、そのロボットと、まるで人間と話しているかのように対話することはできるのであるが。

人間とまったく同じ材料で造らない限り、人間とまったく見分けがつかないアンドロイドを造り上げることは不可能だと思われる。ゆえに、トータルチューリングテストに合格できるアンドロイドとは、生体材料で造られたアンドロイドということになり、現在の技術では実現不可能である。クローン技術に等しい技術が要求される。

一方で、人間はロボットの見かけが厳密に人間そっくりであることに、それほどこだわらない。アミューズメントパークの着ぐるみのキャラクターは、見かけは人間ではないけれども、十分に友だちになれると子どもたちは感じているはずである。後で述べる私たちの研究でも、かなり高齢者が人間と話すよりも、ロボットらしいロボットと話すのを好むことが解かっている。

(2) 人間のパートナーとなる条件は、見かけも含めて厳密に人間らしくあることではなく、人間を相手に対話するように、対話できることである。

(石黒浩「ロボットと人間 人とは何か」より)

注(※)

メタレベル：高次元

コンシェルジュ：ホテルなどで総合的なサービスを提供する係

マルチモーダル：複数の感覚